

「新臨床 X 線診断学」

自治医科大学教授 大 澤 忠 編集

順天堂大学教授

片 山 仁

本書編集者の大澤 忠教授は、昭和 30 年以降のわが国の放射線診断学発展の牽引車となった方である。まだ米国留学がそれほど容易ではなかった時代にいち早くエール大学に留学、いわゆる general radiology の研鑽をされた。

著者の平敷淳子、古瀬 信、土井修、竹川鉦一、平松慶博の各先生は年代的にみて大澤教授に続いた放射線診断学の先兵で、今やわが国の放射線診断学のリーダーシップをとっている方々ばかりである。本書の内容を見て随所に新鮮さを感じるのも、こういった好影響のためであろう。その一方で、本書には新しい画像診断時代にあくまで従来からの X 線診断を基盤として新しい画像診断を加味された編集の基本方針が見事に貫かれている。

さて、本書は率直に言って大作である。いまだかつてこれだけの内容をもった放射線診断学の著書をみることがない。各章の構成は、大体厚生省の国家試験ガイドラインの流れに沿っており、目次がきちんと整理されているので学生諸君にも好都合

であろう。

内容的には up-to-date の知識も多く、研修医以降の年代層に十二分に役立つ深さがある。一方、各臓器について X 線写真読影の進め方、異常陰影の解析、鑑別診断および各疾患についての読影のポイントが意識的に多くの頁数を割いて述べてあり、医学生にとってはわかりやすく、親切な作りとなっている。

また、常に臨床（病態生理）を意識して書かれている点も本書の幅の広さを感じさせる。放射線医のみで執筆すると臨床所見とは全く無関係に X 線診断を我田引水の的に解説されている場合がないでもない。X 線写真を解説する場合は病理学的な背景を常に意識して行うべきは当然であるが、臨床的背景を意識することも大切なことである。

更に本書の特徴は写真、挿図が多いことである。その総数は 1,500 を越える。写真も非常にきれいで、大きさも適当である。見せたい所見は適宜クローズアップ像を挿入してわかりやすくすると共に、矢印などで着目する部分を明らかにしている。

写真は X 線写真のみならず、X 線 CT、シンチグラフィーおよび超音波断層像が含まれている。放射線医学を medical imaging と radiation oncology に分けようとする新しい考え方の先取りの感じがある。

わが国の医学出版界は、この数年出版ラッシュとでも言うべき時代を経験しているが、本書にはその中でも一きわ光るものがある。米国には Paul & Juhl や Meschan などの学生、レジデントのバイブルがあるが、本書はこれを越えた著書と言える。英文であれば必ず高い国際的評価を受けるはずである。

経験的に言って執筆者の熱意とやる気で良い著書が出来上がるかどうかが決まる。読者もそのあたりは敏感に感じとる。本書では適当な人数の分担執筆ということもあろうが、それぞれの執筆者のやる気が強く感じられる。

最後に繰り返しになるが、本書には、新しい知識と基礎的な知識がバランスよくまとめられており、卒前卒後の年代のみならずわれわれの年代にも極めて有用な書になっていることを強調したい。学生、研修医のための標準的教科書と専門参考書のハイブリッドとも言うべきものである。是非、座右に置きたい推薦書である。

B 5 判 730 頁 図 161 写真 1,469
1984 年 ¥ 9,800 円 400

医学書院 刊